

# 東上記

寺田寅彦

青空文庫



八月二十六日床を出でて先ず欄干に倚る。空よく晴れて朝風や、  
 肌寒く露の小萩のみだれを吹いて葉鷄頭の色鮮やかに穂先おほ  
 かた黄ばみたる田面を見渡す。薄霧北の山の根に消えやらず、  
 柿の実撒砂にかちりと音して宿夢拭うがごとくにさめたり。  
 しばらくの別れを握手に告ぐる妻が鬢の後れ毛に風ゆらぎて蚊帳  
 の裾ゆらくと秋も早や立つめり。台所に杯盤の音、戸口に見  
 送りの人声、はや出立たん<sup>いでた</sup>と吸物の前にすわれれば床の間の三宝  
 に枳殻飾りし親の情先ず有難く、この枳殻誤つて足にかけた  
 れば取りかえてよと云う人の情もうれし。盃一順。早く行て船室  
 へ場を取りませねばと立上がれば婢僕親戚上り框に集いて荷物を

車夫に渡す。忘れ物はないか。御座りませぬ。そんなら皆さん御  
機嫌よくも云つた積りなれどや、夢心地なればたしかならず。玄  
関を出れば人々も砂利じやりを鳴らしてついて来る。用意の車五輛口々  
に何やら云えどよくは耳に入らず。からくと引き出せば後にま  
た御機嫌ようの声々あまり悪からぬものなり。見返る門柳監獄の  
壁にかくれて流れる水に漣漪れんい動く。韋駄天いだてんを叱する勢いよく松まつが  
端はなに馳かけ付ければ旅立つ人見送る人にんそく足船頭ののゝしる声々。  
車の音。端艇涯きしをはなるれば水棹みさおのしづく屋根板にはらくと音  
する。舷ふなべりのすれあう音ようやく止んで船は中流に出でたり。水害  
の名残なごり棒ぼう堤づつみにしるく砂利に埋るゝ蘆あしもあわれなり。左側の水  
楼こつちに坐して此方を見る老人のあればきつと中ちゆうぶう風よとはよき見

立てと竹村はやせば皆々笑う。新地しんちの絃歌げんか聞えぬが嬉うれしくて丸山台まで行けば小蒸汽こじょうき一艘そう後より追越して行きぬ。

昔の大名そのの君、すれちがいし船の早さに驚いてあれは何船と問い給えば御附きの人々かしこまりて、あれはちがい船なればかく早くこそと御答え申せば、さらばそのちがい船を造れと仰せられし勿もつたい体たいなさと父上の話はなに皆々またどつと笑う間に船は新田堤にかかる。並んで行く船に苅谷氏も乗り居てこれも今日の船にて熊本へ行くなりとかにてその母堂も船窓より首さしのべて挨拶する様ちと可笑おかしくなりたれど、じつところゆるうちさし込む朝日暑ければにや障子はしごぴたりとしめたり。程なく新高知丸の舷げん側そくにつけば梯子はしごの混雑例のごとし。荷物を上げ座もかまえ、まだ出

帆には間もあればと岩亀亭がんきていへつけさせ昼飯したゝむ。江上油のごとく白鳥飛んでいよいよ青し。欄下の溜池うみがにに海蟹はさみの鉢動はさまかす様がおかしくて見ておれば人を呼ぶ汽笛の声に何となく心急せき立ちて端艇出させ、道中はことさら気を付けてと父上一句、さらば御無事だと子供等の声々、後に聞いて梯子駆け上れば艫ともに水白く泡立つてあたりの景色廻り舞台のようにくるくると廻つてハンケチ帽子をふる見送りの人々。これに応ずる乗客の数々。いつの間にか船首をめぐらせる端艇小さくなりて人の顔も分き難くなればかんばん甲板に長居ふなよいは船暈ふなよいの元と窮屈なる船室はに這い込み用意の葡萄酒一杯に喉うるおを沾うるおして革鞆枕かばんに横になれば甲板にまたもや汽笛の音。船は早や港を出るよと思えど窓外のぞを覗く元気もなし。『新小説』

取り出でて読む。宙ちゆうがい外の「血桜」二、三頁読みかければ船底にすさまじき物音して船体にわか傾けり。皆々思わず起き上がる。港口浅せたるためキールの砂利に触るゝなるべし。あまり気味よからねば半頁程の所読んではいたれど何がかいてあつたかわからざりしも後にて可笑しかりける。船の進むにつれて最早もはや気味悪き音はやんで動揺はようやく始まりて早や胸悪きをじつと腹をしめて専らもっぱ小説に気を取られるように勉つとむればよう／＼に胸静まり、さきの葡萄酒の酔心。ほつとしていつしか書中の人となりける。ボーイの昼食をすゝむる声耳に入りたれどもとより起き上がる事さえ出来ざる吾われの渋茶一杯すゝる気もなく黙つて読み続けるも実はこのようなる静穩の海上に一杯の食かなさえ叶わぬと思われん

事の口惜くちおしければなり。

一篇広告の隅々まで読み終りし頃は身体ようやく動揺になれて心地やゝすがくしくなり、半なかば身を起して窓外を見れば船は今むろとぎき室戸岬を廻るなり。百尺岩頭燈台の白堊日はくあにかがやいて漁舟の波のうちに隠見するもの三、四。これに鷗かもめが飛んでいたと書けば都合よけれども飛とびうお魚一つ飛ばねば致し方もなし。舟傾く時海また傾いて深黒なる奔潮天と地との間に向つて狂奔するかと思わるゝ壯観は筆にも言語にも尽すべきにあらず。甲かんの浦沖うらを過ぐと云う頃ハツチより飯めしびつぜんぐ櫃膳具を取り下ろすボーイの声八やケましきは早や夕飯なるべし。少し大胆になりて起き上がり箸を取るに頭思ほかいの外に軽くて胸も苦しからず。隣りに坐りし三十くらいの叔母様

の御給仕かたじけなしと一碗を傾くればはや厭いやになりぬ。寺田寅彦さんと云う方は御座らぬかとわめくボーイの濁だみこえ声うるさければ黙つて居けるがあまりに呼び立つる故オイ何んだと起き上がれば貴方あなたですかと怪訝けげん顔がおなるも気の毒なり。何ぞと言葉を和やわらげて聞けば、上等室の苅谷さんからこれを貴方へ、と差出す紙包あくれば梨子なし二つ。有難しとボーイに礼は云うて早さつそく速頂戴するに半分ばかりにして胸つかえたれば勿体なけれど残りは窓から外へ投げ出してまた横になれば室内ようやく暗く人々の苦にせし夕日も消えて甲板を下り来る人多くなり、窮屈さはいつそう甚だしけれど吾一人にもあらねば致し方もなし。隣りに言葉なま訛り奇妙なる二人連れの饒じょうぜつ舌しんもいびきの音に變つて、向うのせなあが追おいわけ分を歌い始

むれば甲板に誰れの持て来たものか 轡くつわむし 虫の鳴き出したるなど  
面白し。甲板をあちこちする船員の靴音がコツリ／＼と言文一致  
なれば書く処なり。夢魂いつしか飛んで赴く処は 鷹たかじよう 城のほと  
りなりけん、なつかしき人々の顔まざ／＼と見ては驚く舷側の潮  
の音。ねがえりの耳に革鞆の仮枕いたずらに堅きも悲しく心細く  
われながら浅猿あさましき事なり。残夢再びさむれば、もう神戸こうべが見え  
ますると隣りの女に告ぐるボーイの声。さてこそとにわかになんか  
つきて窓を覗のぞきたれど月なき空に淡路島あわじしまも見え分かず。再びと  
ろ／＼として覚むれば船は既に港内に入って窓外にきらめく舷燈  
の赤き青き。汽笛の吼ほゆるごととき叫ぶがごとき深夜の寂寞せきぼくと云  
う事知らぬ港ながら帆柱にゆらぐ星の光はさすがに静かなり。革

鞆と毛布と蝙蝠傘ことうもりがさとを両手一ぱいにかかえて狭き梯子を上つて甲板に上がれば既に船は棧橋さんぼしへ着きていたり。荻谷氏に昨夕の礼をのべて船を下り安松へ上がる。岡崎賢七とか云う人と同室へ入れられ、宅うちへ端書はがきしたゝむ。時計を見ればまだ三時なり。しかし六時の急行に乗る積りなれば落付いて眠る間もなかるべしと漱石師などへ用もなき端書したゝむ。ラムネを取りにやりたれど夜中にて無し、氷も梨も同様なりとの事なり。退屈さの茶を啜すすれば胸ふくれて心地よからず。とかくするうち東の空白み渡りて茜あかねの一いち抹まつと共に星の光まばらになり、軒下に車の音しげくなり、時計を見れば既に五時半なり。急いで朝飯かき込み岡崎氏と停車場に馳かけつくれば用捨ようしゃげ気もなき汽車進行を始めて吐き出す煙の音

乗り遅れし吾等を嘲るがごとし。珍しき事にもあらねど忌々いまいまし  
 きものなり。先ず荷物を預けんとて二人のを一緒はかに衡らす。運賃  
 式円とは馬鹿々々しけれど致し方もなし。楠なんこう公へでも行くべし  
 とて出立いでたたとせしがまてしばし余は名古屋にて一泊すれども岡  
 崎氏は直行なれば手荷物はやはり別にすべしとて再び切符の切り  
 換えを求む。駅員の不機嫌顔甚だしきも官線はやはり官線だけの  
 権力とか云うものあるべしと、かしこみて願わらぼうい奉りようよう切符  
 を頂戴して立ちいずれば吹き上ぐる朝嵐わらぼうに藁帽飛んでぬかるみ  
 を走る事数すうけん間、ようやく追い付きて取とりとど止めたれど泥にまみれ  
 てあまり立派ならぬ帽の更に見ばえを落したる重ねくの失敗な  
 り。旅なればこれも腹は立たず。元もとまち町を線路に沿うて行く。道

傍の氷店に入つてラムネ一瓶に夜来の渴望も満たしたればこゝに  
 小荷物を預けて楠公祠なんこうしまで行きたり。亀の遊ぶのを見たりとて  
 面白くもなし湊みなとがわ川へ行て見んとて堤を上る。昼なれば白面の  
 魍魅りょうみも影をかくして軒を並ぶる小亭閑かんとして人の気あるは稀な  
 り。並木の影涼しきところ木の根に腰かけて憩いこえば晴嵐せいらん梢を鳴  
 らして衣に入る。枯枝を拾いて砂に嗚呼あゝ忠臣など落書すれば行き  
 来の人吾等を見る。半時間ほども兩人無言にて美人も通りそうに  
 もなし。ようよう立上がりて下流へ行く。河とは名ばかりの黄色  
 き砂に水の気なくて、照りつく日のきらめく暑そうなり。川口に  
 当りて海面鏡のごとく帆船の大き小さきも見ゆ。多門通りより元  
 の道に出てまた前の氷屋に一杯の玉壺を呼んで荷物を受取り停車

場に行く。今ようやく八時なればまだ四時間はこゝに待つべしと思えば堪えられぬ欠伸あくびに向うに坐れる姉様けぐん顔して吾を見る。時これ金と云えばこの四時間何金に当るや知らねどあくびと煙草たばこの煙に消すも残念なり、いざや人物の觀察にても始めんと目を見開けば隣りに腰かけし印しるし半天ばんてんの煙草の火を借らんとて誤りて我が手に火を落しあわてて引きのけたる我がさまの吾ながら可笑しければ思わず噴き出す。この男バナナと隠いんげんまめ二元豆を入れたる提さ籠げかごを携えたるが領えりするしの水雷亭とは珍しきと見ておればやがてベンチの隅に倒れてねてしまひける。富米野と云う男熊本にて見知りたるも来れり。同席なりし東も来り野並も来る。

こゝへ新あらたに入り来りし二人連れはいずれ新婚旅行と見らるゝ御お

出立。<sup>いであち</sup> すじ向いに座を構えたまうを帽の庇<sup>ひさし</sup>よりうかゞい奉れば、

花の御かんばせすこし瘦せたまいて時々小声に何をか物語りたま

う双<sup>そうきよう</sup>頬<sup>おも</sup>に薄紅さして面はゆげなり。人々の視線一度に此方<sup>こなた</sup>へ

向かえば新郎のパナマ帽もうつむきける。この二人間<sup>ま</sup>もなく大阪

行のにて去る。引きちがえて入り来る西洋人のたけ低く顔のたけ

も著しく短きが赤き顔にこればかり立派なる鬚<sup>ひげ</sup>ひねりながら煙草

を人<sup>じんりき</sup>力に買わせて向側のプラツトフォームに腰をかけ煙草取り

出して鬚をかい上ぐるなどあまり上等社会にもあらざるべし。こ

れと同じ白衣着けたる連れの男は顔長く頬<sup>ほおひげ</sup>髯見事なれど歩み方

の変なるは義足なるべし。この間改札口幾度か開かれまた閉じら

れて汽笛の止む間もなし。人來り人去つていつまでも待合の隅に

居残るは吾等のみなるぞつまらなき。ようやく十二時となりて、プラットフォームに出でんとすればこの次のなりとてつきかえされし、重ねくの失敗なりける。ようやくにして新橋行のに乗り込む。客車狭くして腰掛のうす汚きも我慢して座を占むれば窓外のもの動き出して新聞売の声後になる。右には未だ青き稲田を距てて白砂青松の中に白堊の高樓蟹あまの塩屋しおやに交じり、その上に一抹の海青く汽船の往復する見ゆ。左に従い来る山々山さん骨黄色く現われてまばらなる小松ちびけたり。中に兜かぶとの鉢を伏せたらんがごとき山見え隠れするを向いの商人体ていの男に問う。何とか云いしも車の音に消されて判らず。再三問いかえせしも訛なまりの耳なれぬ故か終ついにわからず。気の毒にもあり可笑しくもあれば終にそのままに

止みぬ。後にて聞けば 甲<sup>かぶとやま</sup>山と云う由。あたりの山と著しく模様変れるはいずれ別に火山作用にて隆起せるなるべし。これのみは樹木黒く茂りたり。

蟬なくや小松まばらに山禿<sup>はげ</sup>たり

など例の癖そろく出で来る。大阪にて海南学校出らしき 黒<sup>くろばか</sup>

袴<sup>ま</sup>下り、乗客も増したり。幸いに天気あまり暑からざればさま

でに苦しからず。山崎を過ぐれば与一兵衛の家はと聞けど知る人

なし。勘<sup>かんべい</sup>平らしき男も見えず、ただ隣りの男の眼付や、定九<sup>さだくろ</sup>

郎<sup>う</sup>らしきばかりなり。五十くらいの田舎女の櫛<sup>くし</sup>取り出して頻<sup>しき</sup>り

に髪梳<sup>くしけず</sup>るをどちらまでと問えば「京まで行くのでがんす。息子が

来いと云いますのでなあ」と言葉つき不思議なるを、国はと問え

ば広島近在のものなる由。飾り氣一点なきもほくとつ樸訥のさま氣に入  
 りてさま／＼話しなどするうち京都々々と呼ぶ車掌の声にあわ  
 たゞしく下りたるが群集の中にかくれたり。京に入りて息子とか  
 の宿に行くまでの途中いさゝか覺束なく思わるゝは他人のいらぬ  
 心配かは知らず。やがていなり稻荷を過ぐ。伏見人形に思い出す事多く、  
 祭り日ののぼり幟立並ぶ景色にまつたけ松蕈添えて画きしふせつ不折の筆など胸に浮  
 びぬ。山やましな科を過ぎて竹藪ばかりの里に入る。左手の小高き岡の  
 向うに大石内蔵助くらのすけの住家今に残れる由。先ずとなせこなみ小浪が道みちゆ  
 行きすがた姿心おかに浮ぶも可笑し。やゝ曇り初めしそ空たかむらに篋の色いよゝ  
 深くして清く静かなる里のさまいとなつかしく、願わくば一度は  
 此処ここにしばらくの仮りのいおり庵を結んでおだ篋の虫の声かわず小田の蛙の音にう

き世の塵けがに汚けがれたる腸はらわたすゝがんなど思おもううち汽車はいつしか上り  
 坂にかゝりて両側の山迫り来る。山田の畔あぜにしれいのごとき草花  
 面白おもしろきは何と云うものにや。この辺りまで畑打つ男女何処どことなく  
 悠長ゆうじやうに京びたるなどもうれし。茶畑多くあり。春なれば茶摘みの  
 様さま汽車の窓より眺めて白手拭の群にあばよなどするも興あるべし  
 など思おもいける。大谷おおたにに着く。この上は逢坂おうさかなり。この名を聞  
 きて思おもい出す昔の語り草はならぶるも管くだなるべし。さねかずらと  
 はどんなものかしらず、蔦つた這はいでる崖がきに清水したゝつて線路脇の  
 小溝こうに落つる音涼し。窓より首さしのべて行手を見るに隧ずい道どう眼  
 前まへにようぜん然ぜんとして向うの口銭せにのまわりほどに見ゆ。これを過ぐれ  
 ば左ひだりに鳩におの海蒼うみくして漣漪水色縮ちりめん緬めんを延べたらんごとく、遠山

糲糊もことして水の果ても見えず。左に近く大津の町つらなりて、三  
 井寺いでら木立に見えかくれす。唐崎からさきはあの辺かなと思えど身地を踏  
 みし事なければ堅田かただも石山も粟津あわづもすべて判らず。九つの歳とし父母  
 に従うて東海道を下りし時こゝの水楼はやに魚の塩焼の骨と肉とが  
 面白く離るゝを面白がりし事など思い出してはこの頃の吾なつか  
 しく、父母の老い給いぬる今悲しかり。さては白湾はくわん子と共に名  
 古屋に遊びし帰途伊勢を経て雪夜こゝに一夜を明かせし淋しきな  
 どもさま／＼偲おもばる。草津の姥うばが餅もちも昔のなじみなれば求めん  
 と思ううち汽車出でたれば果さず。瀬田せたの長橋ながはし渡る人稀に、蘆ろ  
 荻てきいたずらに風に戦そよぐを見る。江心白帆の一つ二つ。浅みぎわき汀すに簾  
 様だれようのもの立て廻せるは漁すなどりの業わざなるべし。百足むかでやま山昔に変ら

ず、田原藤太たわらとうたの名と共にいつまでも稚おさなき耳に響こきし事は忘れざるべし。湖上の景色見飽かざる間に彦根城ひこねいつしか後になり、胆いぶき吹山やまに綿雲わたがし這よいて美濃路みのじに入れば空は雨模様となる。大垣の商人らしき五十ばかりの男しき頻りに大垣の近況を語り関せきが原の戦を説く。あたりようやく薄暗く工夫こうふてい体の男甲かんぼし走りたる声張り上げて歌い出せば商人の娘堪かえかねてキ、と笑う。長良川ながらがわ木曾川みじたくつの間にか越えて清洲と云うに、この次は名古屋よと身支度みじたくする間に電燈の蒼白き光曇れる空に映じ、はやさらばと一行に別れてプラットフォームに下り立つ。丸文まるぶんへと思ひしが知らぬ家も興あるべしと停車場前の丸万と云うに入る。二階の一室狭けれども今宵こよひはゆるやかに寝るべしと思えば船中の窮屈むじあつさ蒸暑むしあつさにくら

べて中々に心安かり。浴後の茶漬も快く、窓によれば驟しゅう雨う沛はい然んとしてトタン屋根を伝う点滴の音すゞしく、電燈の光地上にうつりて電車の往きかう音も騒がしからず。こうなれば宿帳つけに來し男の濡れ髪かき分けたるも涼しく、隣室にチリンと鳴るコップの音も涼しく、向うの室の欄干に倚よりし女の白き浴衣ゆかたも涼しげなり。昨日よりの疲れ一時に洗い去られしようにてからだのびくとなる。手を拍うちて床とこをのべさせ横になれば新しき浴衣の肌さわりも快く、隣室の話声遠きように聞えし後は魂まどいずこへか飛んで藻ぬけの殻となり電燈消しに來し事もいつか知らず。円まどかなる夢百里の外に飛んで眼覚むれば有明の絹燈蚊帳かやの外に朧おぼろに、時計を見れば早や五時なり。手洗い口すゞぎなどするうち空ほの／

“と明けはなれたるが昨夜の雨の名残まだ晴れやらず、蚊帳を  
 まくる風しめつぽきも心悪からず。膳に向かえば大野味噌汁。秋し  
 ゆうきんろう  
 琴せい楼かいに仮寓かくうの昔も思い出さしむ。勘定をすませ丸く肥え太り  
 たる脊せい低せいき女に革鞆さ提さげさして停車場へ行く様、瘦馬と牝豚みの道  
 ちゆき  
 行とも見るべしと可笑おかし。この豚存外ちんぐわいに心利きたる奴にて甲斐  
 々々しく何かと世話せわしくくれたり。間もなく駆け来る列車の一隅に  
 座を構えて煙草取り出せばベルの音忙せわしく合図の呼子。汽笛の声。  
 あつた やつるぎ  
 熱田あつたの八やつるぎ 剣森陰より伏し拝みてセメント会社の煙突に白灣子と  
 焼芋かじりながらこのあたりを徘徊はいかいせし当時を思い浮べては宮みや  
 やがわ  
 川行の夜船の寒さ。さては五十鈴いすずの流れ二見ふたみの浜など昔の草枕  
 にて居眠りの夢を結ばんとすれどもならず。大府岡崎おおぶ ごとけ御油ごゆなど

昔しのぼるゝ事多し。豊橋も後になり、鷺津わしづより舞坂まいさかにかゝる  
 頃よりは道ようやく海岸に近づきて浜名はまなの湖窓外に青く、右には  
 えんしゆうなだよう  
 遠州えんしゆう 杳ようとして天に連なる。漁舟江心に向かいてこぎ出せば  
 あいだい  
 欸乃風に漂うて白砂の上に黒き鳥の群れ居るなどは『十六夜日  
 つき  
 記』そのままなり。浜松にては下りる人乗る人共に多く窮屈さ更  
 に甚だしくなりぬ。掛川かけがわと云えば佐夜さよの中なか山やまはと見廻せど僅  
 かに九歳の冬ここ此処を過ぎしなればあたりの景色さらに見覚えなく、  
 島田しまだ 藤枝ふじえだなど云う名のみ耳に残れるくらいなれば覚束おぼつかなし。  
 かなや  
 金谷かなやの隧すいどう道長くて灯とほを点したる、これは昔蛇の住みし穴かと云  
 いししれ者の事など思い出す。静岡にて乗客多く入れ換りたれど  
 美人らしきは遂に乘らず。東の方は村むらさめ雨すと覚しく、灰色の雲

の中に隠見する岬頭こうとういくつ糢糊もことして墨絵に似たり。それに引きかえて西の空麗うるわしく晴れて白砂青松に日の光鮮やかなる、これは水彩画にも譬たとうべし。雨と晴れとの中にありて雲と共に東へへと行くなれば、ふるかと思えば晴れ晴るゝかと思えばまた大粒の雨玻璃窓はりまどを斜に打つ変幻極まりなき面白さに思わず窓縁まどべりをたたいて妙と呼ぶ。車の音に消されて他人に聞えざりしこそ仕合せなりける。

大井川の水涵かれくにして蛇籠じやかごに草離々たる、越すに越されざりし「朝貌あさがお日記」何とかの段は更なり、雲助くもすけとかの肩によつて渡る御侍、磧かわらに錫杖しゃくじょう立てて歌よむ行脚あんぎゃなど廻り燈籠のように眼前に浮ぶ心地せらる。街道の並木の松さすがに昔の名残

を止むれども道脇の茶店まじょうたいたずらにあって鳥毛とりげはさみばこ挾箱まぎらばこの行列見  
 るに由よしなく、僅かに馬士歌まじょうたの哀れを止むるのみなるも改まる御代みよ  
 に余命つなぎ得し白髪おうなの媪いりりが囲炉裏いろりのそばに水漬みずばなすゝりながら  
 孫やしやご玄孫やしやごへの語り草なるべし。

このあたりの景色ほくさい北齋ほくさいが道中画譜をそのままなり。興津おきつを過  
 ぐる頃は雨となりたれば富士も三保みほも見えず、真青なる海に白浪  
 風に騒すなごぎ漁る船の影も見えず、磯辺の砂雨にぬれてうるわしく、  
 先手の隧ずいどう道みちもまた画中のものなり。

此処小駅ながら近来海水浴場開けて都府の人士の避暑に来るが  
 多ければ次第に繁昌する由なり。岩淵いわぶちの辺かみしよばたけ甘蔗畑かんしよばたけ多くあり。  
 折から畑に入る、肥料なるべし異様のかおり鼻を突きて静岡にて

求めし弁当開ける人の胸悪くせしも可笑しかりける。沼津を過ぐれども雨雲ふさがりて富士も見えず。

御ごてんば殿場にて乗客更に増したる窮屈さ、こうなれば日の照らぬが

せめてもの仕合せなり。小山おやま。山やま北きたも近づけば道は次第上りと

なりて溪流脚下に遠く音あり。一いち八はちの屋根に鶏鳴きて雨を帯び

たる風山田に青く、車中には御殿場より乗りし爺おやが提さげたる鈴虫

なくなど、海抜幾百尺の静かさ淋しささま／＼に嬉しく、哀れ

を止むる馬士歌の箱根八里も山を貫たき溪たにをかける汽車なれば関せきも

守りの前に額ひたい地にすりつくる面倒もなければ煙草一服の間に山北

につく。ひとしきり来る村雨に鮎すしの鮎すし売る男の袖しとゞなるもあ

われ。このあたり複線路の工事中と見えたり。山霧深うして記号

標の芒すすぎの中に淋しげなる、霜夜の頃やいかに淋しからん。

これより下り坂となり、国府津こうづ近くなれば天また晴れたり。今越えし山に綿雲かゝりて其処とも見え分かず。さきの日国府津に

て宿を拒まれようやくにして捜し当てたる町外れの宿に二階の絃歌を騒がしがりし夕、夕陽の中に富士足あしがら柄を望みし折の嬉しさ

など思い出してはあの家こそなど見廻すうちにこゝも後になり、大磯おおいそにてはまた乗客増す。海水浴がえりの女の群の一樣に大な

る藁帽子かぶりたるなど目に立つ。柵の外より頻しきりに汽車の方を覗く美髯公びぜんこうのいづれ御前ごぜんらしきが顔色の著しく白き西洋人めく

など土地柄なるべし。立派なる洋館も散見す。大船おおふなにて横須賀行の軍人下りたるが乗客はやはり増すばかりなり。隣りに坐りし

静岡の商人二人しきりに関西の暴風を語り米相場を説けば向うに腰かけし文身いれずみの老人御殿場の料理屋の亭主と云えるが富士登山の景況を語る。近頃は西洋人も婦人まで草鞋わらじにて登る由なりなどしきりに得意の様なりしが果ては問わず語りに人の難儀をよそに見られぬ私の性分までかつぎ出して少時しばしも饒舌しゃべり止めず、面白き爺さんなり。程ほどが谷や近くなれば近き頃の横浜の大火乗客の話柄わへいを賑わす。これより急行となりたれば神奈川鶴見などは止らず。夕陽海に沈んで煙波うら杳ようたる品川の湾に七砲台おぼろ朧おぼろなり。何の祝宴か磯辺の水楼に紅燈山形につるして絃歌湧き、沖に上ぐる花火夕闇の空に声なし。洲崎の灯影長うして江水漣漪れんい清く、電燈煌こうとして列車長きプラットフォームに入れば吐き出す人波。下駄の音靴のひゞ

き。

(明治三十二年九月)

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 東上記

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>